

平成 18 年 11 月 21 日発行
通巻 376 号
発行 (社) 日本オーディオ協会

Japan
Audio
Society

JAS

journal

2006
Vol. 46

No 11 & 12

- JAS インフォメーション
「音の日」行事のお知らせ
平成 18 年度 10 月理事会・運営会議報告
- 連載：テープ録音機物語
その 21 アンペックスの台頭 (2)
350 シリーズ・テープ録音機 -2-
- メンバーズプラザ
自薦ソフト紹介

阿部 美春

大林 國彦



社団法人 日本オーディオ協会



C O N T E N T S



(通巻376号)

2006 Vol.46 No.11/12 (11・12月合併号)

発行人：鹿井 信雄

社団法人 日本オーディオ協会

〒101-0045 東京都中央区築地 2-8-9

電話：03-3546-1206 FAX：03-3546-1207

Internet URL

<http://www.jas-audio.or.jp>

3 JAS インフォメーション

「音の日」行事のお知らせ

平成18年度10月理事会・運営会議報告

5 連載：テープ録音機物語

阿部 美春

その21 アンペックスの台頭(2)

350シリーズ・テープ録音機 -2-

12 メンバースプラザ

自薦ソフト紹介

大林 國彦

11・12月合併号をお届けするにあたって

トーマス・エジソンがおおよそ130年前の1877年、世界で初めて蓄音機「フォノグラフ」を発明し、時空間の音の保存、再現に成功した日である12月6日をオーディオの誕生日「音の日」としています。

「音の日」には、音を通じて文化や生活に貢献した方々を顕彰する「音の匠」の贈呈式と、音楽制作や放送番組制作の現場の音づくりに貢献したエンジニアを表彰する「日本プロ音楽録音賞」の授与式を行い、音の文化や技術の素晴らしさを多くの人達に伝える活動を続けております。

本年から新たにこれらのイベントに加えて、できるだけ多くの人々に「いい音」を体感していただく試みとして、当協会法人会員の協力を得て「音の日」をはさむ期間を「期待する音の探求・試聴体験旬間」として、一般の方が各社のショールームや試聴施設に足を運んで進化するA・AV機器で「自分の求める音」をじっくりと体験できるように、イベント情報の提供に努めることといたしました。この期間に試聴のできるイベントの詳細は協会ホームページに掲載いたします。

(編集委員長)

☆☆☆ 編集委員会委員 ☆☆☆

委員長 藤本 正熙

委員 豊島 政実 (四日市大学)

委員 伊藤 博史 ((株) D&M デノン)

濱崎 公男 (日本放送協会)

大林 國彦

森 芳久

蔭山 恵 (松下電器産業(株))

森下 正巳 (パイオニア(株))

北村 幸市 ((社)日本レコード協会)

山崎 芳男 (早稲田大学)

高田 寛太郎 (アムトランス(株))

JAS Information

「音の日」行事のお知らせ

平成 18 年度「音の日」行事

トーマス・エジソンがフォノグラフを発明した 1877 年 12 月 6 日にちなんで、1994 年に社団法人日本レコード協会、社団法人日本音楽スタジオ協会等と協調して制定した「音の日」が、今年も近づいてまいりました。

「音の日」行事として恒例の第 11 回「音の匠」顕彰式と記念講演会、ならびに第 13 回日本プロ音楽録音賞受賞者を囲む「音の日のつどい」パーティを下記の通り実施します。

(記)

平成 18 年度「音の日」行事

12 月 6 日 (水) 16:00~19:30

会場 東京・虎ノ門パストラル本館 1 階 葵の間
〒105-0001 東京都港区虎ノ門 4-1-1 TEL.03-3432-7261

「音の日」行事プログラム

● **16:00~16:20 第 11 回「音の匠」顕彰式**
本年度の「音の匠」は、幼少より目が不自由ななかで、その優れた聴覚を活かし、聴覚の素晴らしさを説くと共に人々に勇気を与える活動をされている、エッセイストの三宮麻由子(さんのみや まゆこ)さんに贈呈します。

● **16:30~17:30 記念講演会**
小林和男氏(作新学院大学教授・NHK 解説委員)に聞き手役をお願いして、多くの著作や講演会で御活躍中の三宮麻由子さんのお話をうかがいます。

● **18:00~19:30 「音の日のつどい」**

(参加費 5000 円)

「音の匠」ならびに同日開催の第 13 回日本プロ音楽録音賞授賞式関係者もご参加の「音の日」交流パーティです。JAS 会員および関連団体関係者

との懇談の場ですので是非ご参加ください。

参加予約の受付

11 月 30 日 (木) までに、参加ご希望のプログラムを FAX (03-3546-1207) または電話 (03-3546-1206) にて協会事務局に御連絡下さい。

会場のご案内

- 地下鉄日比谷線神谷町駅 4b 出口より徒歩 2 分
- 地下鉄銀座線虎ノ門駅 2 番出口より徒歩 8 分



「音の日旬間体験キャンペーン」について

本年から新たに「音の日」を契機に、できるだけ多くの人々に「いい音」を体感していただく試みとして、当協会法人会員の協力を得て本キャンペーンを行なうことといたしました。

これは、「音の日」をはさむ期間を「期待する音の探求・試聴体験旬間」として、一般の方が各社のショールームや試聴施設に足を運んで、進化する A・AV 機器で「自分の求める音」をじっくりと体験できるように、イベントの集中化とその情報の提供に努めるものであります。

各社自慢のオーディオおよびオーディオビジュアル (A・AV) 機器での試聴体験ができるショールームや施設をホームページ (<http://www.jas-audio.or.jp/>) にて近日中にご案内します。

JAS Information**10 月度理事会・第 67 回運営会議の報告**

平成 18 年 10 月 2 日に 10 月度理事会・第 67 回運営会議が理事 26 名の出席のもと協会会議室で開催されました。

10 月度理事会議事

(第 1 号議案) 新会員の承認を求める件

6 月 5 日理事会以降 9 月 29 日現在までの間に、法人会員および個人正会員の入会は無く、個人賛助会員が 303 名になったことが報告され承認されました。

第 67 回運営会議議事

(1) 平成 18 年度「音の日」準備状況報告

音の日実行委員長の森芳久理事より、12 月 6 日「音の日」に虎ノ門パストラルにて第 11 回「音の匠」顕彰と、記念講演会および音の匠と日本プロ音楽録音賞受賞者を囲む「音の日のつどい」パーティを実施すること、「音の匠」としてエッセイストの三宮麻由子氏を推挙するとの説明があり了承されました。

三宮さんは、幼少時に視力をうしないましたがそのすぐれた聴覚を活かし、聴覚の素晴らしさを説くと共に人々に勇気を与える活動をされています。

(2) 普及推進部会の進捗報告

9 月 5 日の普及推進部会の審議内容が事務局より次のように報告されました。

事前にいただいた部会各位の意見をふまえた本年度の普及活動の事務局集約案は次の通りです。

①大人、青少年、ファミリー等に階層分けせず、「多くの人に、いい音を聴いていただく体験機会の拡大」に的を絞る。

②体験機会として、「A&V フェスタ」や「音の日」を活用する。

③青少年向けのオーディオ体験機会提供につき具体化を進める。

④サラウンドのプロモーションは、JAS 事務局にて他業界や団体への意向打診を始める。

以上を審議し次のような部会としての方向付けをいただきました。

①例えば音の日に連動した試聴体験会実施を会員各社等へ呼びかけ、告知手段等の詳細を検討するワーキンググループを早急に編成する。当初は当部会登録会社を中心に委員を委嘱する。

②青少年を対象とするイベントは、手始めに財団法人 新宿生涯学習財団(レガスクラブ)よりの提案(レガス音楽同好会)に協力することとし、事務局が実施協力会社を募りつつ進める。

③サラウンドの普及・啓発は、JEITA のサラウンドサウンド専門委員会と連携をとりつつ検討を進める。

以上の普及推進部会における普及事業の方向付けについて、活発な意見交換が行われました。

(編集事務局 注記：普及推進部会での方向付けを受けて、本年度の「音の日」をはさむ旬間に「音の日旬間体験キャンペーン」を行います。)

(3) 平成 18 年度予算の執行進捗状況報告

事務局より平成 18 年度の業務が一般会計と特別会計で差異が生じているものの、全体的にはおおむね予算案に沿って執行されていると報告されました。



「テープ録音機物語」

その21 アンペックスの台頭 (2)

350 シリーズ・テープ録音機 - 2 - あべ よしはる
阿部 美春

3. 351 シリーズの増幅器(Electronics)

350 型では 400 型後期の回路をそのまま踏襲し、パネル・デザインだけを変えていた(本物語その 20、写真 20-2 参照)。そして 5 年後の 1958 年になってステレオ・モデルの追加で、351 シリーズとなった。

今度はパネルデザインを変えずに、回路と構造を大幅に変更し、回路はプリント配線になった。*1(写真 21-1)。

真空管は 350 型ではオクタール・ソケットのメタル管、または GT 管が使用されていたが、351 型はミニチュア管になった。

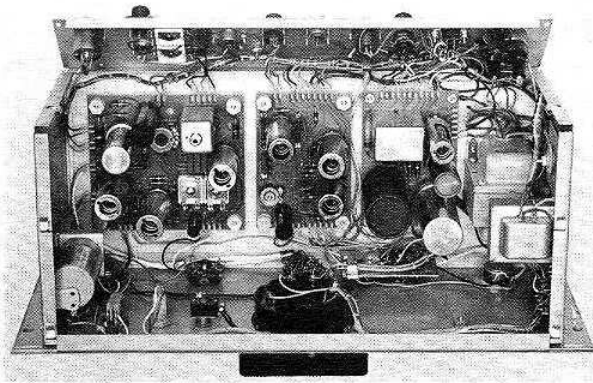
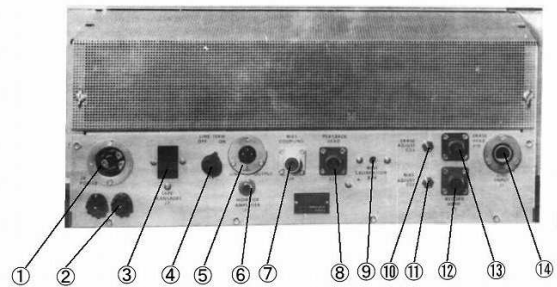


写真 21-1 351 シリーズの録音・再生増幅器内部 (164)

そして、1 シャーシ・1 チャンネルとして、2 チャンネル・2 トラック・ステレオには 2 個の増幅器を接続し、第 1 チャンネルをマスターとよび、第 2 チャンネルをスレーブとよんで 2 シャーシ構造を採った。写真 21-2 に後面・コネクタパネルを、図 21-1 に 2 チャンネルの場合のテープ駆動機構部とマスター、スレーブアンプ間の内部接続を示す。

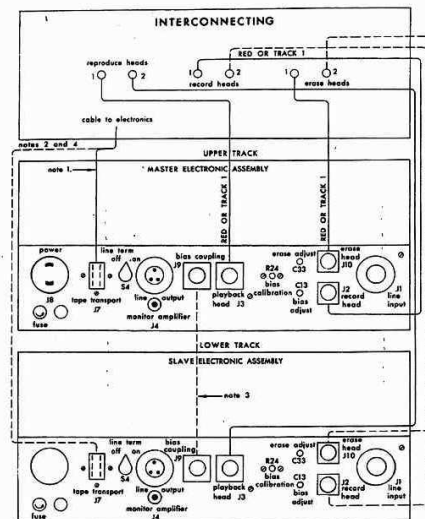
図 21-2 に増幅器系統図(Block Diagram)を、図 21-3 に回路図を示す。正面、各操作部は図 20-2 (物語その 20) を参照されたい。



Ampex 351

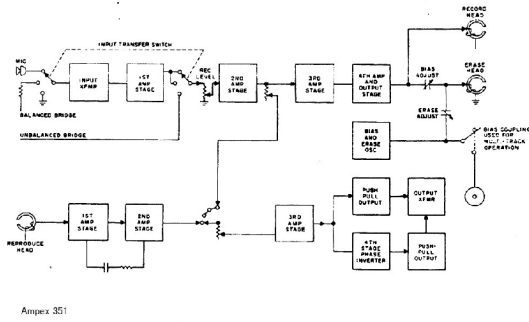
- | | |
|---------------|------------------|
| ① 電源コネクター | ⑧ 再生ヘッド* |
| ② ヒューズ | ⑨ バイアス・キャリブレーション |
| ③ テープトランスポート | ⑩ 消去電流調整 |
| ④ ライン出力切替え | ⑪ バイアス調整 |
| ⑤ ライン出力 | ⑫ 録音ヘッド* |
| ⑥ モニター出力 | ⑬ 消去ヘッド* |
| ⑦ バイアス・カップリング | ⑭ ライン入力 |

写真 21-2 351 シリーズの録音・再生増幅器後面 (166)



- NOTES:
- 05-0157-01 POWER EXTENSION CABLE IS USED WITH SINGLE TRACK PORTABLE EQUIPMENT.
 - 05-0159-01 INTERCONNECTING CABLE IS USED WITH DUAL TRACK STEREOGRAPHIC EQUIPMENT.
 - 05-0160-02 BIAS INTERCONNECTING CABLE IS USED WITH PORTABLE DUAL TRACK STEREOGRAPHIC EQUIPMENT.
 - 05-0159-02 POWER INTERCONNECTING CABLE IS USED WITH PORTABLE DUAL TRACK STEREOGRAPHIC EQUIPMENT.

図 21-1 351 シリーズの内部接続 (166)



Ampex 351

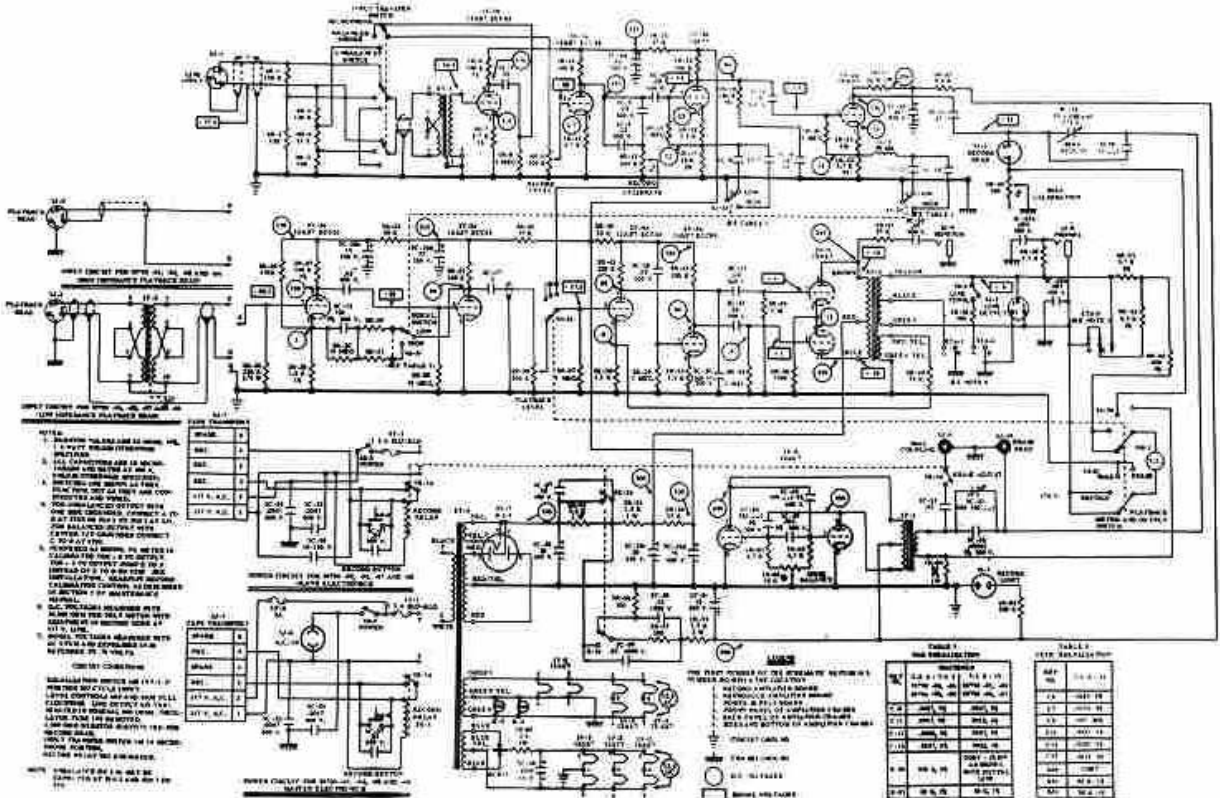
図 21-2 351 シリーズの録音・再生増幅器系統図 (166)

(1) 録音増幅器：

録音入力はマイク、平衡型ブリッジ・ライン入力、不平衡型ライン入力の3段切替で、マイク入力は入力トランスを経て双三極管 12AX7 の片側で増幅したあと入力切替、そして音量調整器(Record Level)

に入る。平衡型のブリッジ入力はパッド（固定減衰器）を経て入力トランスに、不平衡型ハイ・インピーダンス・ライン入力は直接、入力切替、そして音量調整器に入る。平衡型ライン入力はパッドで落としてマイク入力に入るので、不平衡型に比べ、SN比の点で不利になる。これは 400 型でも同じ方法である。音量調整器の後、12AX7(2ND AMP STAGE)と 12AT7(3RD AMP.STAGE)で 2 段増幅したあと、録音出力段 (4TH AMP STAGE,12AT7) に入る。

録音ヘッドは出力段のプレートから直接、定電流回路によって駆動される。録音補償は第 3 段目カソード回路にコンデンサー、4 段目出力段のカソードに LC をいれて、電流帰還を利用して、高域補償を行っている。テープ速さによる補償特性はそれぞれ、コンデンサーによって切替えられる (図 21-4)。



Ampex 351

SCHEMATIC DIAGRAM - ELECTRONIC ASSEMBLY

図 21-3 351 シリーズの録音・再生増幅器回路図 (166)

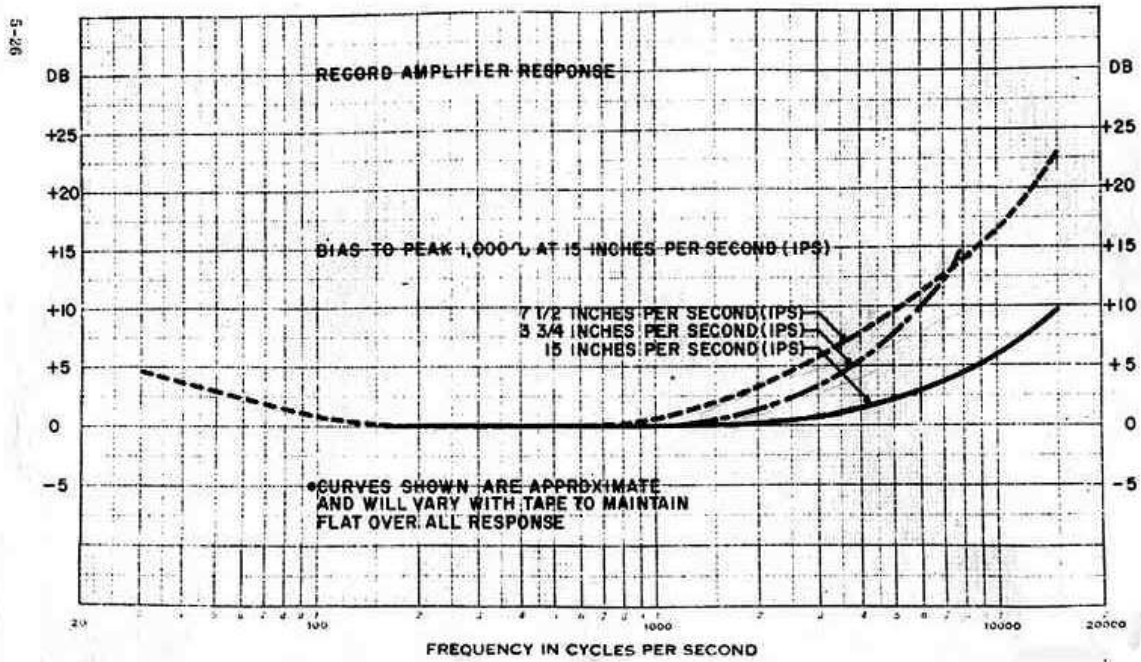


図 21-4 351 シリーズの録音増幅器周波数特性 (166)

(2) 再生増幅器：

再生回路は再生ヘッドからの出力を 12AX7、2 段で増幅し、再生レベル調整(Playback Level)を経て、1 段(3 段目)増幅して出力回路に入る。3 段目 12AX7 の残り片側はプッシュプル出力への位相反転に使われる。再生補償は 2 段目プレートから初段のカソードにかかる電圧帰還を利用して補償を行っている。スピードによる補償特性は 15 インチ/秒と 7-1/2 インチ/秒の再生補償特性(3180 μ s+50 μ s)は共通だが、7-1/2 と 3-3/4 インチ/秒の場合は高域の補償特性が異なるので(50 μ s と 90 μ s)、負帰還抵抗によって中高域以降の帰還量をリレーで切替えている(図 21-5)。

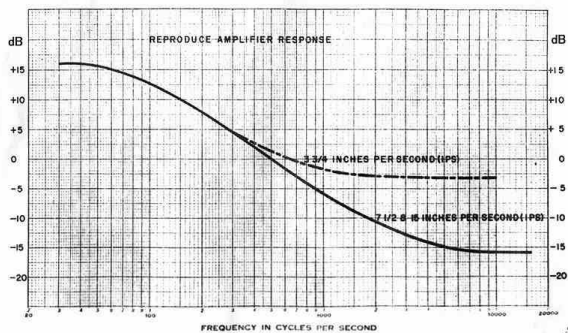


図 21-5 351 シリーズの再生増幅器周波数特性 (166)

再生出力回路は 12AU7 のプッシュプル接続で、その出力はトランスを介して、600 Ω ライン出力となる。トランス 2 次側には負帰還用のコイルをもち、その出力は 3 段目のカソードに帰されている。

(3) バイアス発振器：

バイアスおよび消去用発振器は 12AU7 をプッシュプル接続したマルチ・バイブレーター型である。発振周波数は 100 kHz、発振コイル 2 次側から消去電流調整とバイアス電流調整(それぞれトリマーコンデンサー)を通して、消去および録音ヘッドに高周波電流が供給される。

2 チャンネルの場合、マスターとスレーブそれぞれ発振器をもち、消去ヘッドと録音ヘッドの各チャンネル個々に接続されている。それぞれ、発振周波数に若干のずれがあるとビートを起こすので、これをなくすために各発振器出力を結合し(図 21-1、note 3、それぞれ Bias Coupling コネクター間をケーブルで結ぶ)、引込み現象を利用して、発振周波数をそろえている。

(4) モニター回路：

モニターは再生増幅器の出力回路に接続された VU メーターとホンジャックによって行われる。また切り替えスイッチ (METER & OUTPUT SWITCH ⑧)により、再生出力、録音出力レベル、バイアス電流、消去電流がモニターできる。録音モニターは録音回路の2 段目出力から出力切替えに入っている。

出力段は 12AU7 の P-P (350 型では 6J5 または 6C5 のシングル) であるから、仕様には、最大出力は+14VU (+18 dBm) 以上得られるとうたっている。

4. 354 シリーズ

アンペックスは 1960 年に入って、1 シャシー・2 チャンネルの録音・再生増幅器を作った(写真 21-3)。

- | | |
|----------------|------------------|
| ① VUメーター | ⑦ 録音チャンネル切替え |
| ② 録音表示ランプ | ⑧ 半固定調整部 |
| ③ 電源スイッチ | ⑨ エポキシ樹脂 PCB |
| ④ ヘッドホンジャック | ⑩ 電源トランス |
| ⑤ 録音レベル調整 | ⑪ プラグイン入力アダプター |
| ⑥ 録音・再生モニター切替え | ⑫ プラグイン EQ アダプター |

写真 21-3 の記号説明

これを 351 型のテープ駆動機構部と組み合わせて 354 シリーズとし、マウントを、従来と同様、コンソール、ポータブル、そしてラックマウントを用意した (写真 21-4)。

表 21-1 に 354 シリーズの主な仕様を示す。

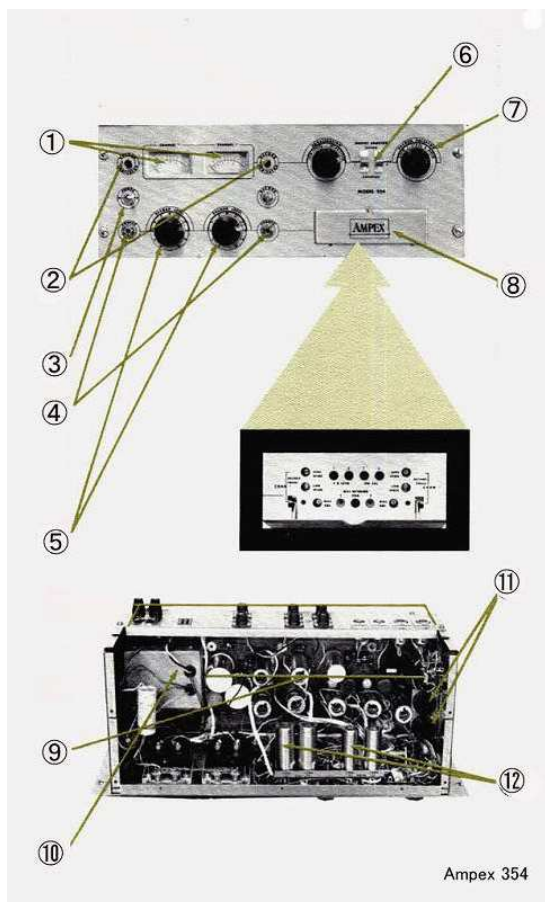


写真 21-3 354 シリーズの録音・再生増幅器 (169)

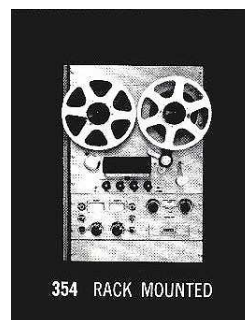
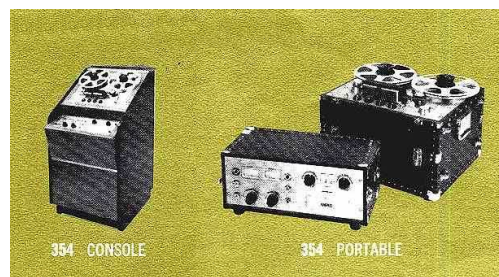


写真 21-4 Ampex 354 シリーズの各形式 (169)

アンプは半固定調整部分のうち、再生出力レベル、録音レベル、バイアス調整、バイアス・メーター、録音イコライザーを表パネル面にだして、調整を容易にしている。

増幅器の回路は、図 21-6 に録音回路とバイアス発振器を、図 21-7 に再生回路と電源部を示す。

ヘッド	2チャンネル 消去、録音、再生
テープ速度	7-1/2 & 15ips または 3-3/4 & 7-1/2 ips
周波数特性	15ips: ± 2 dB 30-18,000Hz 7½ips: ± 2 dB 40-12,000Hz 3¾ips: ± 2 dB 40-8,000Hz
SN比	ピーク録音レベル対非聴感補正雑音 15ips: 55dB 7½ips: 55dB 3¾ips: 50dB
クロストーク	65dB @400Hz
ワウ・フラッター	15ips: < 0.15 %rms 7½ips: < 0.2 %rms 3¾ips: < 0.25 %rms
起動・停止時間	起動: 1/10 sec 停止: < 2 インチ
タイミング精度	$< 2\%$ (± 2 sec @ 30分番組)
録音入力	不平衡ライン: 100k Ω , ≥ -5 dBm 平衡ライン: 20k Ω プラグイントランス使用 マイク: プラグイン・マイクプリアンプ使用 40dBゲイン・アンプ: ≥ 4.5 mV 60dBゲイン・アンプ: ≥ 0.45 mV
再生出力	+4dBm @ 0VU, 600 Ω bal.or unbal 最大出力: +22dBm
モニターリング	モノまたはステレオヘッドホンジャックで チャンネル個々に録音・再生モニターが可能
電源	117V, 2A, 50 または 60Hz
マウンティング ラックマウント	コンソール、ラック、ホータブル (2ケース) トランスポート: 19"(w) x 15-3/4" (h), アンプ: 19"(W) x 7"(h), Total 80Lbs
コンソール ホータブル	48"(h) x 24-1/2"(w) x 28-1/2"(d), 155Lbs 103Lbs (2ケース)

表 21-1 Ampex 354 仕様

(1) 録音回路

録音入力はコネクタの後にオクタールソケットを経て、録音音量調整器(100k Ω)に接続される。オクタールソケットにはプラグインアダプターが使用され、標準はダミープラグすなわち、不平衡型ライン入力(100k Ω)に対応し、平衡型ブリッジ入力(20k Ω トランス)またはマイク入力はオプションのプラグインアダプターで選択される。マイクアダプターはカタ

ログではマイクトランスとプリアンプが内蔵されていて低感度マイク(60dBゲイン)または高感度マイク(40dBゲイン)に対応できるようになっていたが、実際には商品化されず、代わってMX-35型ミキサーがオプションで売られていた*2。

録音アンプは複合管 6AW8A 1本、すなわち、入力段に3極電圧増幅管、出力段に5極出力管(2W程度)が使われている。録音イコライザは段間にプラグイン式で、NAB、CCIR、またはAME特性*3が2組のテープ速度(15ips / 7.5ips と 7.5ips / 3.75ips)毎に用意されている。

録音チャンネル切替(RECORD SELECTOR)は左からSAFE, CHA, CHA+CHB, CHB,SAFEの5段切替で、ステレオ録音のほか、モノでサウンド・オン・サウンド録音*4ができる。SAFEはこの位置で録音回路は切れて、誤消去防止装置となる。

消去およびバイアス用発振器は12BH7のプッシュプル接続である。351型の12AU7に比べてやや高出力となる。

(2) 再生回路

再生回路は双三極管 12AX7 2段と双三極管 6BK7A (または 6BK7B) 2段の計4段構成で、3段目と4段目の6BK7はモニター回路になっている。再生イコライザは2段目のプレートから初段カソードにいたる負帰還回路を利用し、録音と同様にプラグインで各規格、テープ速度に対応している。モニターはサウンド・オン・サウンドができるように各チャンネル別個に切り替えている。

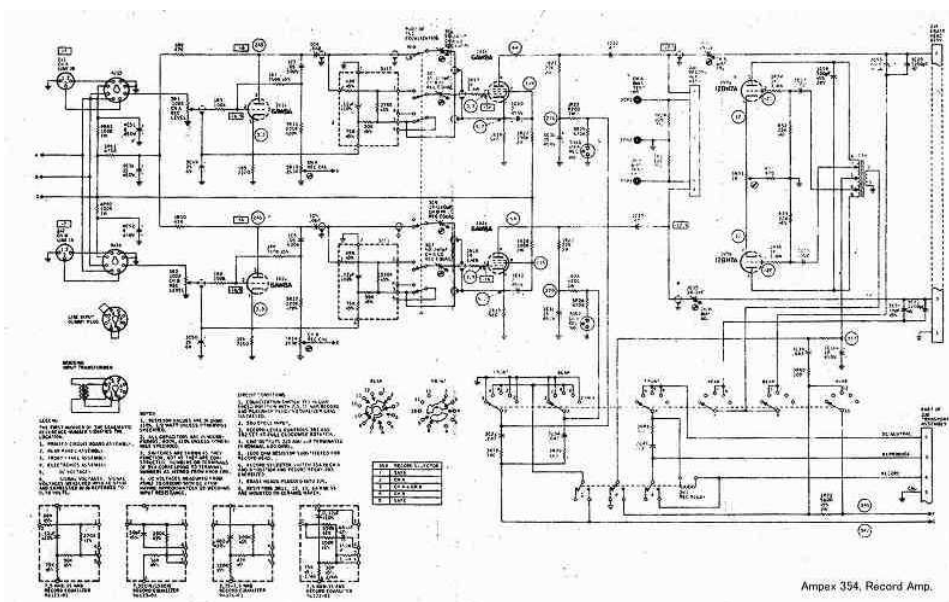


図 21-6 354 シリーズの録音増幅器部回路図 (168)

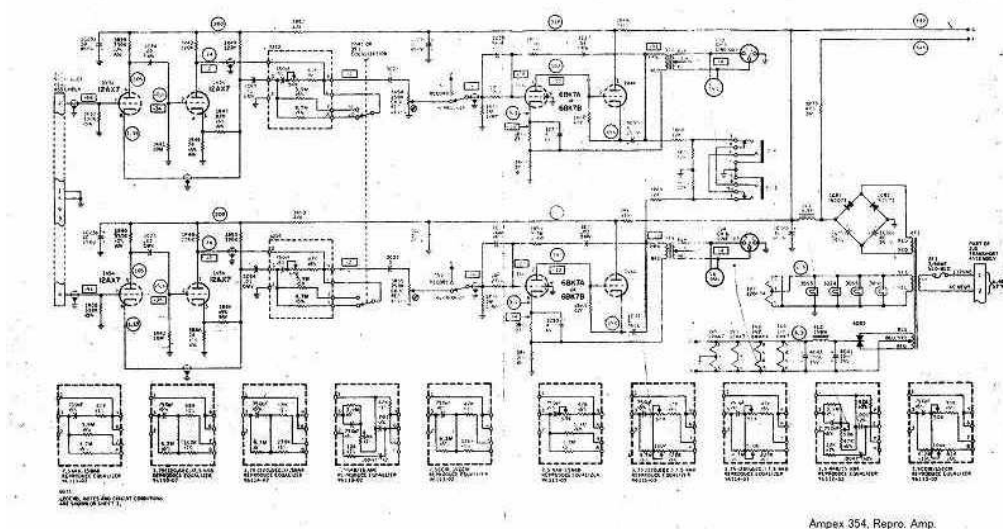
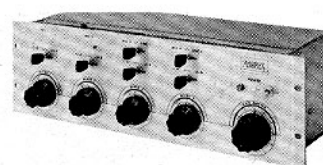


図 21-7 354 シリーズの再生増幅器部回路図 (168)

(注*1) 351 シリーズになって、増幅器の内容は一新されたが、外見（正面パネル）は変わっていないので、正面パネルの入力切替スイッチ（図 20-2、INPUT TRANSFER SWITCH ⑦）の下に黒色の小さいドットマークをつけて、350 シリーズと区別した。

(注*2) 400 型ではミニチュア低雑音 5 極管 5879 を使った 4 入力、1 出力のミキサーがオプションで用意さ

れていたが、354 型になって、小型のステレオ用ミキサーが発売された（写真 21-5）。



Ampex MX-35

写真 21-5 Ampex MX-35 型ミキサー (171)

入力は4x ロー・インピーダンス・マイクと切替で2x ハイ・インピーダンス、出力は2チャンネルで、各入力は左右いずれかに振り分けることができる。

(注*3) 当時、録音特性は標準化され、世界的にはアメリカのNAB規格と主にヨーロッパを中心としたCCIR規格がある。

NABは、本物語その11でも述べたようにNational Association of Broadcastersの略で、アメリカの民間放送連盟である。このなかに録音再生規格委員会があり、放送用のテープレコーダー、ディスクレコーダーなどの規格が定められている。

CCIRはComite Consaltatif International des Radio Communicationsの略で、国際無線通信諮問委員会と訳されている。テープレコーダーの場合はプログラムの国際交換を目的として推奨規格(Recommendation)が制定されている。

ここでいう録音特性は、標準再生系の周波数特性を規定していて、その時定数は下記(表21-2)のとおりである。

(単位: μ s)

38.1cm/s (15in/s)		19.05cm/s (7-1/2 in/s)		9.53cm/s (3-3/4 in/s)	
T1	T2	T1	T2	T1	T2
3180	50	3180	50	3180	90
—	35	—	70	—	—

表 21-2 標準再生補償特性の時定数

AME特性は1958年にテープ録音のSN比改善策としてアンペックス社から提案され、同社テープ録音機のマスター用イコライザーに採用された。AME特性は図21-8に示すよう、録音時に主に中高域補償を標準特性より多くして、高域の録音レベルをあげ、再生時に

は逆に下げることによって、ヒス等の高域雑音を減らすという方法である⁽¹⁷⁰⁾。

高域補償量の増加で逆に高域のひずみが増える結果となり、その後のドルビーNR方式(A型)の登場もあって、AME方式はあまり普及しなかった。

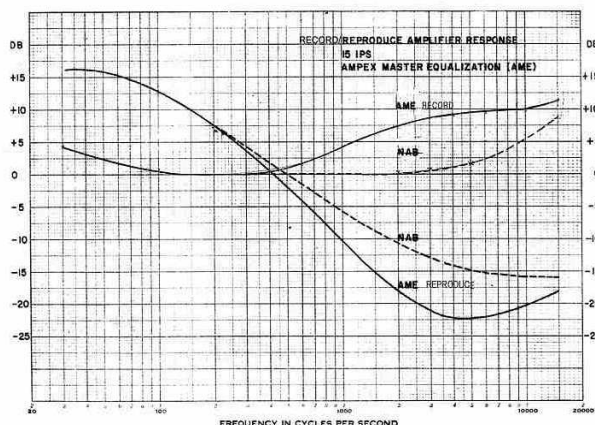


図 21-8 AME 録音・再生周波数特性⁽¹⁷⁰⁾

(注*4) 1台の多チャンネル・テープレコーダーを使って、たとえば一人で多重奏(唱)を録音する方法、すなわち音の上に音を重ねることをサウンド・オン・サウンド(Sound on Sound)録音という。1947年に、当時は円盤録音機を使って、ギター奏者レスポールがこの手法を使って録音したのが最初と言われている。詳しくは次回に紹介したいと思っている。

(次号につづく)

【参考文献】 (前号よりつづく)

- (170) “Ampex Master Equalization(AME)” Ampex Service Bulletin No.15(rev.1958.09)
- (171) Audio Products Catalog No.1178(1963)

MEMBERS PLAZA



ストラヴィンスキー(1882-1971)

「春の祭典」ほか

指揮：エサ=ペッカ・サロネン

ロスアンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団

Deutsche-Grammophon SACD Hybrid(輸入盤)

00289 477 6198

サロネンの解釈が生きた音楽

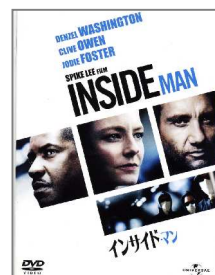
エサ=ペッカ・サロネンがムソルグスキーの原典版の「はげ山の一夜」、バルトーク「中国の不思議な役人」組曲、ストラヴィンスキー「春の祭典」をロスアンゼルス・フィルと録音し発売になった。

リムスキー・コルサコフによる慣用改訂版と異にし、やや粗雑感が認められ物議を醸すこともある「はげ山の一夜」や、リズムの書法、ストーリー性等々の議論も多々あった作品群を選曲しているが、サロネンは、各フレーズにある強弱の起伏に伴った奏法や、遠近のバランスを熟慮したサウンドの設定等に巧みな解釈を展開して素晴らしい音楽を実現させている。例えば、音楽の流れに柔軟性をもたせ緊張感を薄らげる演奏に心がけ、「春祭」等では、複雑で苛烈なリズムを音響バランスを保ちながら、それに旋律を重ねるような演奏を要求して音楽を創ることに終始しているように聴こえるのである。

ウォルト・ディズニー・ホールで2006年1月に96kHz/24bitで収録したSACDのHybrid-Disc(輸入盤)で、SACDの2chを主体に聴いてみた。

CD層に比べ広帯域感に優れ、切れのある音で、やや北米風の匂いがするキャラクター(最近の傾向)であり、曲風とサロネンが主張する音楽にマッチした音質であることが理解できる。「春祭」のリズムを刻む大太鼓や「中国の不思議な役人」でのオルガンなど、ディテールが明快で地を這うような低音域が再現でき、更に、長い残響音が実に美しく付加された極めて優れた音質で聴かせてくれる。

大林國彦(会員番号0799)



「インサイド・マン (INSIDE MAN)」

監督：スパイク・リー

キャスト：デンゼル・ワシントン/クライブ・オーウェン/

ジョディ・フォスター/ウィレム・デフォー/etc

UNIVERSAL P. J UNSD-44300

驚愕のストーリー展開と結末のサスペンス

意外なストーリーの展開と結末のサスペンス「インサイド・マン」のDVDがリリースされた。

白昼堂々とマンハッタン信託銀行が襲われ、人質をとって立籠もる事件が発生する。頭脳明晰な犯人グループのリーダーには警察の動きは全て計算済みであるかのように見える。急行した敏腕な刑事ですら交渉の糸口が見えない。型通りの要求はあるものの、犯行の動機や目的も分らず、警察に包囲されても一向に慌てる気配がなく、焦りさえも見られない、犯人達は逃げる気は全くないようにも見えてきた。

交渉にも応じず膠着状態が続くなか、現場に乗り込んできた女性弁護士が神経戦に拍車を掛ける存在となり、これが起因して次第に真相が露呈して行く。

やがて、突如として犯人グループ達が正面出口から堂々と出てくるが、人質も含めて全員が同じ格好をしており区別不能の状態であった。犯人は、50名の人質に同じ格好をさせる作戦をとったのである。果たして、誰が犯人なのか、誰が人質なのか、そして意外な結末が待っていた。

高S/N比と繊細な画質の映像が楽しめる。浮きのないコントラストがサスペンス性を強調する効果が出ており、暗部の彩度を褐色系にする採光が美しい映像となって観賞させてくれる。

音響設計が素晴らしく、音声(科白)など非常に奇麗に再現でき、SE(効果音)も自然性が保たれ定位感があって安定した音場が創造されたサラウンド設計である。

大林國彦(会員番号0799)